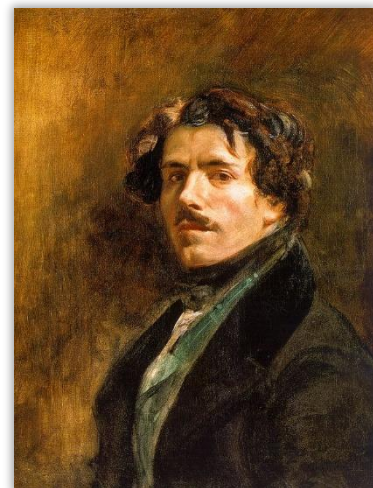


世界遺産「ルーヴル美術館」所蔵 ドラクロワの描いた『民衆を導く自由の女神』と『キオス島の虐殺』 ～2枚の大作が世界に与えた影響～



世界遺産「ルーヴル美術館」に所蔵されている、画家ウジェーヌ・ドラクロワの『民衆を導く自由の女神』。門外不出とも言われるこのフランスの至宝は、かつて1度だけ国外へ貸し出されたことがあります。その行先は、なんと日本。1999年に東京国立博物館で開催された企画展『ドラクロワ 民衆を導く自由の女神』で公開されました。それ以降の約27年間、本作が海外で展示されたことはありません。この作品は、フランスにとってきわめて重要な作品なのです。

ドラクロワ(1798年～1863年)は、19世紀フランスのロマン主義を代表する画家です。ドラクロワが^{すいせい}彗星のごとく現れたのは19世紀前半。ナポレオンの失脚後、ルイ18世の即位によって王政が復活した時代でした。当時のフランス絵画界では、17～18世紀の劇的な「バロック絵画」や、繊細で優美な「ロココ絵画」を経て、古代ギリシャ・ローマ時代への回帰運動から生まれた「新古典主義」の時代を迎えていました。正確な描写力を重視する古典的技法の「新古典主義」。それに堅苦しさを感じた画家たちが劇的で自由な表現を求め、こうして生まれたのが「ロマン主義」です。その先駆的存在が、ドラクロワでした。一方、新古典主義の中心人物であったのが、ドミニク・アングル(1780年～1867年)です。アングルを中心とした「新古典主義」とドラクロワを中心とした「ロマン主義」という、ふたつの大きな潮流が並存した時代でした。



『緑のベストを着た自画像』
ウジェーヌ・ドラクロワ
1837年 ルーヴル美術館所蔵

ドラクロワの代表作には、七月革命を題材にした『民衆を導く自由の女神(1830年)』や、ギリシャ独立戦争を描いた『キオス島の虐殺(1824年)』などがあります。これらの作品は、とても強いメッセージ性があり、当時のヨーロッパ社会に大きな衝撃を与えました。今回は、「革命の画家」と称されるドラクロワの代表的な2作品について、考察していきます。

■ 『民衆を導く自由の女神』 (1830年、縦約 260 cm×横約 325 cm)



この作品については、絵画技法の観点から考察します。一般的に評されることとして、次の3点が挙げられます。

- ・女神の右手を中心に、画面全体が三角形の構図、左から右へ斜めの構図になっている。
- ・画面全体に、赤、白、青のフランス国旗の色が、効果的にちりばめられている。
- ・この場所がパリであることを示すように、後方にノートル・ダム大聖堂が描かれている。

しかし、本作の迫力を生み出している核心は、別の点にあると考えられます。

まず注目すべきは、女神の右手の位置です。女神の右手の位置が画面の最上部で、画面左右のちょうど真ん中にあり、女神が掲げている国旗が、なんと切れていることです。重要なのは、「描かれた位置と描き方」です。また、この作品は勢いよく、画面から飛び出してきそうな気がしませんか。

なぜ、そのような印象を受けるのか、解説します。

もし一般の人がこの絵を描こうとしたら、フランス国旗もキャンパスの枠の中に収め、主人公となる女神は画面中央寄りに描くでしょう。大事な国旗を“切る”なんてことは、情動的な勇気が要ります。しかし、ドラクロワは、その効果を知っていたからでしょう、躊躇いもなく“切って”います。「切る」と言うよりも、「国旗を画面からはみ出して描く」と言った方が合っているかもしれません。画面の中で収めたなら、この勢いは出ません。国旗をキャンパスの枠の中で収めてしまうと、鑑賞者側に怒涛のごとく押し寄せてくるような迫力は出ません。枠からはみ出して描くと、とても勢いのある作品となるのです。これは、絵画技法のひとつです。左右の中央、画面の最上部に女神の右手、そのさらに上にフランス国旗が枠からはみ出して、描かれています。女神の掲げる国旗は勢いよくたなびき、あたかも画面から飛び出てくるかのように見えますよね。こうした構図は、女神が民衆を力強く導いていく様子を、より強調する効果を生み出しているのです。

なぜ女神だったのかという点についてもご説明しますと、「ヨーロッパ」の語源は、ギリシャ神話に登場する女性「エウローペ」に由来するとされる、という説が有力です。また、ヨーロッパには古くから多くの女神信仰が存在しま



す。たとえば、ギリシャ神話ではアフロディテ(ヴィーナス)、アテナ(ミネルヴァ)、アルテミス(ディアナ)などの女神が知られています。

ヨーロッパでは、劇的な場面で女神を登場させ、民衆を惹きつけようとする場合があります。ドラクロワが、この作品で女神を選んだ理由も、そこにあります。女神に先導され奮い立つ民衆。強いものに立ち向かい、「もう負ける気がしない」といった力強さが表現されています。そして、その描かれたものが現実のものとなってしまったのですから、なおのこと。この作品は、1830年に起きた七月革命を描いたものです。制作も同年で、革命直後に描かれたこととなります。翌1831年には、パリのサロンに出品され、大きな反響を呼びました。サロンは世界各国から要人が集まる国際的な展覧会で、出品作の影響力は絶大です。七月革命によりブルボン王朝は崩壊し、この作品の発表後、独立運動はヨーロッパ各地に拡大しました。1831年にはベルギーがオランダからの独立に成功しました。ポーランドでも独立運動が起きましたが、ロシアに鎮圧されました。ドラクロワの作品は、その強烈なメッセージ性によって民衆を動かす力があるのです。

この作品と世界遺産とは直接の結びつきはありませんが、パリを訪れる際には、バスティーユ広場に足を運んでみてください。広場には、「七月革命記念柱」が建てられています。この革命で犠牲となった民衆を追悼する目的で造られました。ちなみに、「バスティーユ牢獄襲撃事件(1789年)」は、フランス革命で起きたもので、七月革命とは別の出来事です。バスティーユ牢獄の跡地は、バスティーユ広場として整備されています。ニューヨークに在る世界遺産、『自由の女神像(世界を照らす自由)』は、ドラクロワの『民衆を導く自由の女神』がモデルとも言われています。1886年、アメリカ独立100周年を記念してフランスから贈られました。制作者はフランスの彫刻家、フレデリック・オーギュスト・バルトルディ(1834年~1904年)です。『民衆を導く自由の女神』が描かれたのは1830年ですから、パリで育ったバルトルディも、実際にこの作品を目にしたことでしょう。ドラクロワの作品は、後世の世界遺産誕生にも大きな影響を与えたのです。

■ 『キオス島の虐殺』(1824年、縦約420 cm×横約350 cm)

ターバンを巻いたオスマン帝国(現トルコ共和国)の兵士たちは地平線の上に描かれ、対してギリシャ人は、地平線の下に描かれています。画面は、上から襲いかかるオスマン帝国の兵士と、虐殺されるギリシャの人々という構図になっています。『キオス島の虐殺』は、1822年に実際に起こった歴史的事件を題材に描かれました。当時のギリシャはオスマン帝国の支配下にありました。

この作品の主演は誰でしょうか。『民衆を導く自由の女神』の方は一目瞭然ですが、この作品の主演はひっそりと佇んでいる、「初老の女性」です。ただ腰かけているだけで、パッと目を見開き、どこか遠くを見つめています。途方に暮れているのか、絶望しているのか、助けを求めているのか……。 “無表情”なので、窺い知ることはできません。他の登場人物は、何らかの仕草をしていたり、



悲惨な表情やうなだれた表情で描かれています。しかし、この初老の女性だけは静かに描かれています。“無表情”が観る者を強く惹きつけるのです。この作品は「動」と「静」で表現されています。初老の女性以外の登場人物は何らか「動いている“のに対して、彼女だけは唯一の“静けさ”なのです。

『キオス島の虐殺』は、1824年のパリのサロンに出品され、鑑賞者に大きな衝撃を与えました。ギリシャの人々がオスマン帝国軍によって悲惨な目に遭わされている、という強烈なメッセージが伝わってきます。それは、ヨーロッパの歴史地図を変えるほどの衝撃を与え、イギリスやフランスなどがギリシャを支援し、1830年のギリシャの独立へと繋がったのです。

この惨劇の舞台となった、「キオス島」。世界遺産に関心のある方の中には、この島の名前にピンと来た方もいらっしゃるかもしれません。ギリシャには『ダフニ、オシオス・ル・カス、ヒオスのネア・モニの修道院群』という世界遺産があります。その中の「ネア・モニの修道院」がキオス島に在ります。島の名称は「CHIOS」と表記され、「キオス」とも「ヒオス」とも読みます。このネア・モニの修道院も、キオス島の虐殺の舞台となってしまいました。島民の殆どが殺害され、その数は1万人以上とも言われています。キオス島はトルコ本土からわずか10kmほどの距離に在り、強大なオスマン帝国軍の上陸を防ぐことは、到底不可能でした。

そのため、キオス島は、あってはならない惨劇の舞台となったのです。『ダフニ、オシオス・ルカス、ヒオスのネア・モニの修道院群』の登録基準は、(ii)と(iv)です。主にビザンティン美術の影響や建築的価値などが評価されて登録されましたが、この^{せいさん}凄惨な出来事は考慮されていません。ネア・モニの修道院にはこのような背景があることを、記憶に留めてほしいと思います。女性や子供を含む1,000人以上の虐殺された人々が、この修道院に眠っているからです。貴重なモザイク画も破壊されました。負の遺産、記憶の場となってもおかしくない場所なのです。



ネア・モニの修道院

『民衆を導く自由の女神』は、画面から出てくるような「動き」を表しているのに対して、『キオス島の虐殺』は、ひとりの初老の女性の「静」によって、観る者を画面に引き込む効果があります。「動」と「静」、この2作品は、まったく対極にある作品なのです。また、どちらの作品も、ヨーロッパ全土に大きな革命の嵐を巻き起こしました。『民衆を導く自由の女神』はベルギーの独立、『キオス島の虐殺』はギリシャの独立に。概して画家の影響というものは、その多くは作風が他の画家へ及ぶ程度ですが、ドラクロワの影響はスケールが桁違いです。作風だけでなく、一般大衆を巻き込み、国家体制さえ揺るがすほどの力を持っていました。加えて、2作品はとても大きな作品で、人物は等身大に近い大きさで描かれています。それが迫りくるような、また、そこに居るような^{かも}臨場感を醸し出しているのです。ドラクロワが「^{ゆえん}変革の画家」と言われる所以が、この2枚の作品から分かります。

そして、どちらの作品も、実際に起きた歴史上の出来事を題材とし、それはドラクロワの最も得意とする主題でもありました。もっとも、ドラクロワはこの場面に居合わせたわけではなく、想像で描いた作品ではあるのですが、当時の画家が歴史上の出来事を描く場合、生存者から状況を聞いたり、媒体から情報を集めたりして、場面設定を構想し、作品を完成させました。この2作品は、言わば、報道写真のような役割も果たしていたのです。



自由の女神像

ドラクロワの作風に、大きな影響を与えた作品があります。それは、テオドール・ジェリコー(1791年～1824年)作の『メデュー
ス号の筏(1818年～1819年頃)』です。ドラクロワはこの作品か
ら色使い、画面構成、ドラマティックな構図、登場人物の設定、強
いメッセージ性を吸収しています。どことなくドラクロワの作
風と似ていますよね。

パリには、ドラクロワを記念して建てられた「ウジェーヌ・ドラク
ロワ美術館」があります。サンジェルマン・デ・プレ教会のすぐ近く
で、瀟洒なアパルトマンのような佇まいです。ドラクロワがアトリエ
として実際に住んでいた建物で、『民衆を導く自由の女神』の下絵
や、若い頃の作品なども展示され、とても見応えがあります。作品だ
けでなく、パレットも見ることができ、彼が好んだ色彩や制作の工夫
を垣間見ることができるのも、興味深いです。日本人観光客の姿はあ
まり見かけませんが、ドラクロワの作品や生涯に関心がある方は、ぜ
ひ訪れてみてください。



『メデュース号の筏』/テオドール・ジェリコー
1818年-1819年頃 ルーヴル美術館所蔵



ウジェーヌ・ドラクロワ美術館

沼田政弘